

臨地実習前後の看護学生の自己受容性と大学生生活不安の変化
—3年次から4年次の縦断的調査から—

高橋永子, 尾原喜美子, 橋本和子*

高知大学教育研究部医療学系看護学部門 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮
* 福山平成大学看護学部 〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸 117-1

**Changes in nursing students' self-acceptance and college life anxiety before
and after clinical nursing practice**
- A longitudinal study of students in their 3rd and 4th years -

Eiko TAKAHASHI, Kimiko OHARA, Kazuko HASHIMOTO*

Kochi University Reserarch and Education Faculty Medicine Unit, Nursing SciencesCluster.
Kohasu, Oko, Nankoku City, Kochi(783-8505) Japan

* Faculty of Nursing, Fukuyama Hesei University.

117-1 Kamiwanari, Miyukicho, Fukuyama City, Hiroshima (720-0001)Japan

要 約

看護学生の3年次から4年次への自己受容性および大学生生活における不安の変化を明らかにするためA県内看護系大学生の3年次生61名を対象に縦断的に質問紙調査を実施した。「自己受容性」「大学生生活不安」「自己志向型完全主義」の調査結果は、小項目では学年差が見られ4年生で増加していたが、全体としては大きな差異は認められなかった。4年生の抱える課題の時期に合わせた指導内容の選択と適切な指導時期の重要性が明らかとなり、最終学年学生への指導にとどまらず、各学年での学習意欲への指導の必要性が示唆された。

Abstract

To clarify the changes in nursing students' self-acceptance and college life anxiety during their 3rd and 4th years, we conducted a longitudinal study, based on a questionnaire, of 61 nursing college students from their 3rd year in

A Prefecture. Although the results of our survey on "self-acceptance", "college life anxiety", and "self-oriented perfectionism" showed increases under minor criteria for the students in their 4th year, it did not reveal significant changes as a whole. The study also suggests the importance of adequately and timely supervising the students in their 4th year when writing their theses, as well

as the importance of promoting the students' motivation to study through their college years.

キーワード : 看護学生、自己受容性、大学生生活、臨地実習

Key words : nursing college students、self-accept ability、college life、praticce

I. 緒 言

青年期は、ありのままの自分を受け入れることが確立する時期だといわれる¹⁾。自己受容はアイデンティティの獲得に重要な役割を果たし4年間の学生生活の大きな課題である。また、看護学生の3年次から始まる本格的な看護専門者としての臨地実習は、看護学教育の中でも主要な科目である。学生は、実習指導者との関わりなど大きな不安を抱えて実習に臨み²⁾、それを克服しつつ、アイデンティティの獲得や自己を受け入れていくと考えられる³⁾。この臨地実習が、看護学生の成長にどのような影響を与えているのか、臨地で出会った多くの人々との体験や看護実践の積み重ねがどのように看護学生に影響を与えているのかを明らかにしたいと考えた。3年次から4年次へと経験を重ねることによる自己受容性や大学生活における不安の変化を明らかにすることで、学生指導への示唆を得たいと考えた。

II. 目 的

看護学生の3年次から4年次への自己受容性および大学生活における不安の変化を明らかにすることで、最終学年次への教育的示唆を得る。

III. 研究の枠組

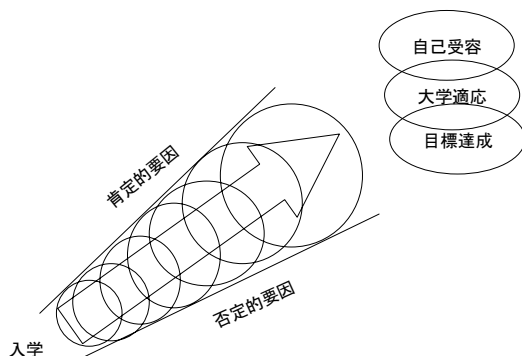


図1 看護学生の自己成長に影響を与える要因の研究枠組

大学入学後、学生の自己受容性を否定する要因として、友人・家族とのトラブル、経済的問題・アルバイト、講義・実習などがある。この否定要因から怒り・悲しみを体験する。自己を肯定する要因として、友人や家族の支え、アルバイト、サークル活動、講義・実習などがあり、この肯定要因を通して喜び・嬉しさを体験する。体験することで満足感・達成感が得られ自己を受容し、大学への適応や自己の目標達成へと向かうようになる(図1)。

IV. 用語の定義

宮沢ら^{4)–6)}の文献を参考に下記のように用語を定義した。

1. 自己受容性とは、自己の諸側面(身体的側面・能力的側面・性格など)をありのままに受け入れることで、「自己理解」「自己承認」「自己価値」「自己信頼」の4側面で構成される。

2. 大学生生活不安とは、大学生生活に不明瞭な恐怖感を抱くことで、「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」の3側面で構成される。
3. 自己志向的完全主義とは、自分の行動に過度な完全を求める傾向であり、「完全でありたいという欲求」「自分に高い目標を課する傾向」「ミスや失敗を過度に気にする傾向」「自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向」の4側面で構成される。

V. 研究方法

1. 研究対象者

- 1) 平成18年度にA県内 K大学看護学科に入学した看護学生61名を対象とした。

- 2) 対象学生の学習進度の内容及び科目構成

K大学看護学科のカリキュラムは、看護の基本概念である「人間」「健康」「環境」「看護活動」を主軸として「対象論領域」「環境論領域」「看護活動論領域」「総合看護領域」の4本柱をもとに構成され、科目区分として、初年次科目、教養科目、専門基礎科目、専門科目で構成されている。

3年次の調査時期は、看護専門科目の講義については、ほとんど終了しており、臨地実習は、早期臨床体験実習、基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱが終了しており、4年次の調査時期は、領域別実習が全て終了している。

2. 研究方法

- 1) 調査期間・内容

- (1) 調査期間：2008年6月～2009年7月

- (2) 調査方法：調査は、3年次6月（臨地実習前）と4年次7月（臨地実習終了後）に、同意の得られた学生に対し、調査票を配布した。無記名による自記式調査法により調査を行い、調査用紙の回収は、講義室に回収箱を1週間程度設置し、本人の意思により投函してもらった。

- (3)調査内容

- ① 属性：年齢、家族数、サークルに所属の有無、大学入学後の喜びの体験、悲しみの体験、怒りの体験など
- ② 自己受容性に関する内容 27項目
- ③ 大学生生活不安に関する内容 29項目
- ④ 自己志向的完全主義に関する内容 20項目

3. 使用尺度

- 1) 「自己受容性」尺度

宮沢⁷⁾が作成した尺度で、作成者の許可を得て使用した。全項目27項目よりなり、自己理解(8項目)、自己信頼(7項目)、自己承認(6項目)、自己価値(6項目)から構成されている。これらの項目について「あてはまる」から「あてはまらない」までの4段階で評定を求めた。そして、「あてはまる」から順に4点から1点まで点数化を行った。逆転項目には逆転配点を行った。

- 2) 「大学生生活不安」尺度

藤井⁸⁾が作成した尺度で、作成者に許可を得て使用した。全項目29項目よりなり、日常生活不安(13項目)、評価不安(11項目)、大学不適応(5項目)の3下位尺度から構成されている。これらの項目に「はい」に2点「いいえ」に1点の点数化を

行った。

3) 「自己志向的完全主義」尺度

桜井⁹⁾が作成した尺度で作成者の許可を得て使用した。全項目20項目よりなり、完全でありたいという欲求(5項目)、自分に高い目標を課する傾向(5項目)、ミスや失敗を過度に気にする傾向(5項目)、自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向(5項目)から構成されている。これらの項目に、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の6段階で評定を求めた。そして、「非常に当てはまる」から順に6点から1点まで点数化を行った。

4. 分析方法

3年次と4年次の比較には、「大学生生活不安尺度」ではノンパラメトリック検定およびt検定を行った。「大学生生活不安尺度」「自己志向的完全主義尺度」では、記述統計およびt検定を行い、推測統計値の有意水準は両側5%未満とした。分析は統計ソフトSPSS14.0 j for windowsを使用した。

VI. 倫理的配慮

1. プライバシー保護のため、個人が特定されないように無記名とし、符号を付け暗号化すること、身元が明らかになる可能性のある情報は削除することを対象者に説明した。
2. 研究に協力しなくても成績には影響がないこと、また調査内容で答えたくない項目は、回答は拒否できることを説明した。
3. 調査用紙の回収は、回収箱を準備し対象者が、自由意思で投函できるようにした。
4. データはこの研究にのみ使用すること、また、結果は、関連学会や専門誌に投稿すること説明した。
5. A大学倫理委員会の承認を得た後、調査を開始した。

VII. 結果

1. 対象者の特性

3年次の学生61名中、回収は58名、回収率95%であった。平均年齢は21歳、家族と同居の有無では、「有」7名(12%)、「無」40名(69%)、サークルの参加は46名(79.6%)、参加なし12名(20.4%)であった(表1)。4年次の学生、58名中、回収は47名、回収率81%であった。

表1 対象者の特性 n=58

	項目	人数	%
年齢	20歳	6	10.3
	21歳	46	79.3
	22歳	5	8.6
	24歳	1	1.7
	合計	58	100
家族と同居	有	7	12
	無	40	69
	無回答	11	19
	合計	58	100
サークル参加	有	46	79.6
	無	12	20.4
	合計	58	100

2. 喜び・悲しみ・怒りの体験の体験

3 年次では、喜びの体験は、友人が最も多く 41 名 (70.9%)、次いで家族 6 名 (10.4%) であった。悲しみの体験も友人がもっとも多く、12 名 (20.7%)、次いで家族 11 名 (19%) であった。怒りの体験は臨地実習が最も多く 13 名 (22.4%)、次いで友人 12 名 (20.7%) であった。4 年次では、喜び、悲しみ、怒りの体験全てで家族が多くなっていた (表 2)。

表 2 喜び・悲しみ・怒りの体験

感情 要因	喜び				悲しみ				怒り			
	3年次		4年次		3年次		4年次		3年次		4年次	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
家族	6	10.4	17	36.2	11	19	15	31.9	5	8.6	7	14.9
友人	41	70.9	1	2.1	12	20.7	12	25.5	12	20.7	3	6.4
経済的 学業面	2	3.4	0	0	7	12.1	2	4.3	8	13.8	0	0
教員との関係	2	3.4	4	8.5	4	6.9	0	0.0	4	6.9	1	2.1
臨地実習	2	3.4	3	6.4	1	1.7	1	2.1	9	15.5	0	0
その他	2	3.4	1	2.1	9	15.5	0	0.0	13	22.4	0	0
無回答	1	1.7	0	0	12	20.7	0	0.0	7	12.1	0	0
合計	2	3.4	21	44.7	2	3.4	17	36.2	0	0	36	76.6

3. 看護学生の大学生生活不安

「日常生活不安」の項目別では、『4 年間で卒業できるかどうか不安』『友達と協力できるか不安』など 6 項目において 3 年次が多くなっていた。『先生と話をするとき、緊張する』『生活費が足りるかどうか心配』などの項目は 4 年次が多くなっていた (図 2)。

「評価不安」の項目別では、『分からない問題に出合った時、頭が真っ白』『大学の成績を考えると憂鬱』等 5 項目において 3 年次が多くなっていた。『申請した授業の単位がもらえるか心配』『卒業論文がうまく書けるか心配』では、4 年次が多くなっていた (図 3)。

「大学不適応」の項目別では、『転学あるいは転部したい』『大学を退学したいと思う』は、3 年次が多く、『入学した学部が自分に合っていない』など 3 項目で 4 年次が多くなっていた (図 4)。

カテゴリー別では「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」の全てで 3 年次が高くなっており、「日常生活不安」「評価不安」で有意差がみられた (図 5)。

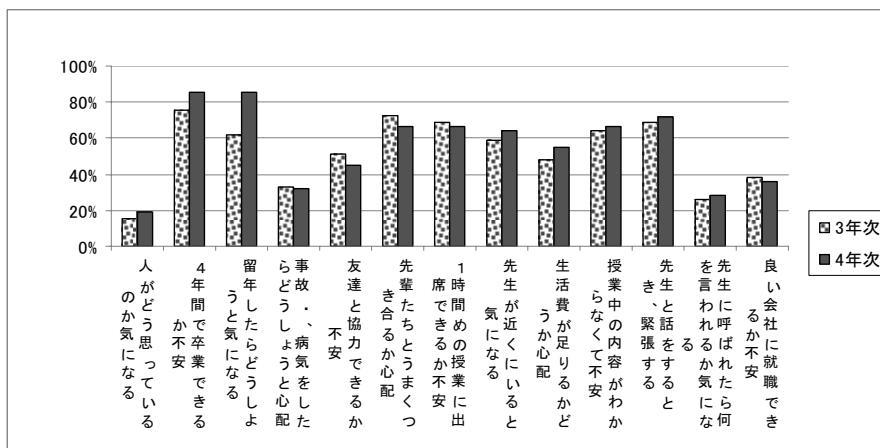


図 2 日常生活不安

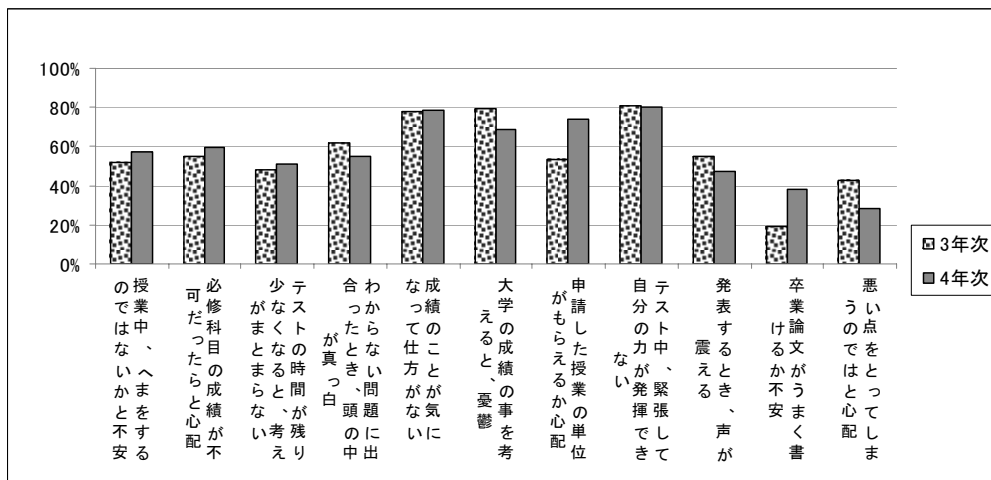


図3 評価不安

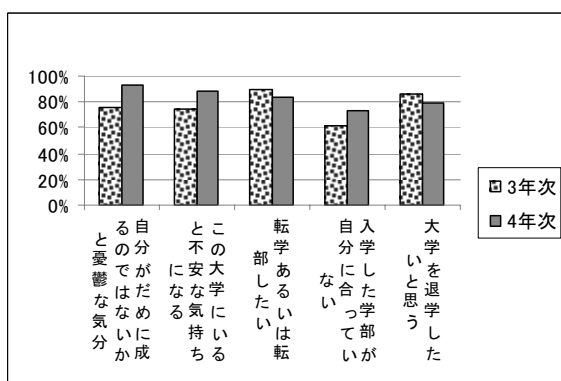


図4 大学不適応

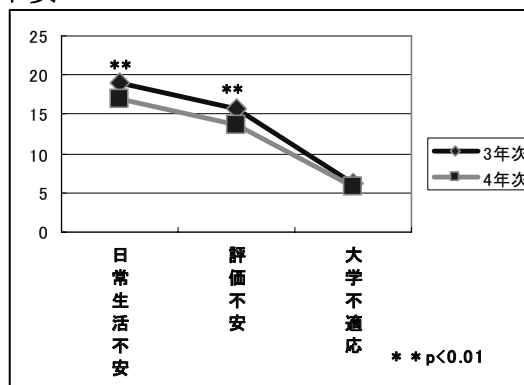


図5 大学生生活不安 (カテゴリー別)

4) 看護学生の自己受容性

学年別で項目を比較すると、「自己理解」の側面で『私は自分の特徴がわかる』のみが3年次の平均値が高かった。「自己承認」の側面では、全ての項目で4年次の平均値が高くなっており、『私は自分に合った生活をしている』で有意差がみられた。

「自己価値」の側面では、全ての項目で4年次の平均値が高くなっており、『私は生きる価値のない人間である』『私は生まれてこない方が良かった』『私は生きていても仕方ない』で有意差がみられた。「自己信頼」の側面で『私は自分のことは自分で解決する』の項目のみで3年次の平均値が高かった(表3)。

カテゴリー別で比較すると、「自己理解」「自己承認」「自己価値」「自己信頼」の全ての側面で4年次の平均値が高く、「自己承認」「自己価値」で有意差がみられた。(図6)。

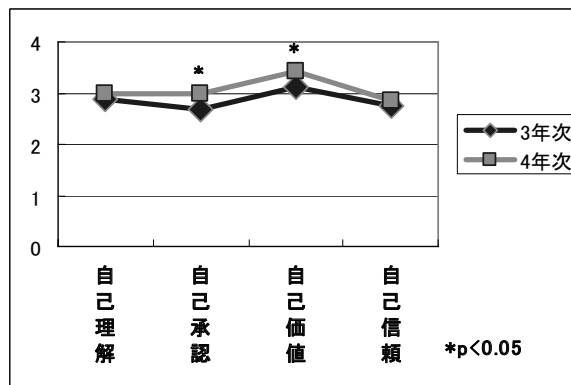


図6 自己受容性 (カテゴリー別)

表 3 自己受容性 (項目別)

カテゴリ別	項目	3年次 (n=58)		4年次 (n=47)		p
		mean	SD	mean	SD	
自己理解	私は自分の性格を知っている	3.19	0.63	3.28	0.58	
	私は自分の短所がわかる	3.38	0.64	3.40	0.54	
	私は自分の長所がわからない	2.67	0.87	2.77	0.84	
	私は自分の能力や才能を冷静にみることができる	2.60	0.70	2.70	0.69	
	私には自分の得意な事が何かわからない	2.55	0.84	2.74	0.87	
	私は自分の容姿(姿かたち)の悪い面がわかる	3.19	0.58	3.26	0.67	
	私は自分の事がよくわからない	2.59	0.88	2.85	0.91	
	私は自分の特徴がわかる	3.03	0.65	2.77	0.87	
自己承認	今の私は本当の自分ではない	2.92	0.80	3.17	0.96	
	私は今の自分を大切にしたい	2.79	0.77	3.06	0.89	
	私は自分に合った生活をしている	2.81	0.74	3.17	0.84	*
	私は性格を全く別の自分に変えたい	2.74	0.89	3.00	0.98	
	私は自分とは違う誰か別の人になりたい	2.72	1.01	2.96	1.08	
	私は容姿(姿かたち)に変えたいところが多い	2.14	0.89	2.53	0.95	
自己価値	私は生きる価値のない人間である	3.24	0.82	3.62	0.64	*
	私は生まれて来ない方が良かった	3.36	0.87	3.64	0.67	*
	私には人に誇れるものが何もない	2.95	0.87	3.51	0.69	
	私は生きていても仕方ない	3.33	0.82	3.53	0.75	*
	周りの人は皆、私より立派な人間である	2.59	0.82	2.87	0.88	
	私は価値のない人間である	3.22	0.88	3.45	0.75	
自己信頼	私は自分で決めた事には責任を持つ	2.97	0.65	2.98	0.77	
	私は困難にぶつかってもそれを克服できる	2.74	0.64	2.85	0.59	
	私は自分の事は自分で解決する	2.83	0.70	2.77	0.73	
	私は自分の才能を生かした人生を送る事ができる	2.52	0.66	2.72	0.72	
	私は自信がないため物事を諦めがちである	2.47	0.82	2.60	0.74	
	私は将来何があろうと自分なりにやっていける	2.72	0.70	2.89	0.71	
	私は目標に向かって生活している	2.90	0.69	3.09	0.78	
			逆転項目		* p<0.05	

5) 自己志向的完全主義尺度

自己志向的完全主義を項目別にみると『何事においても最高の水準を目指している』『高い目標を持つ方が自分のためになると思う』『簡単な課題ばかり選んでいてはだめな人間になる』の3項目で4年次が高くなっていた。その他の項目では、全て3年次が高くなっていた(表4)。

自己志向的完全主義をカテゴリー別でみると、「自分に高い目標を課する傾向」のカテゴリーでわずかに4年次が高くなっていたが、その他のカテゴリーでは、3年次が高くなっていた。(図7)。

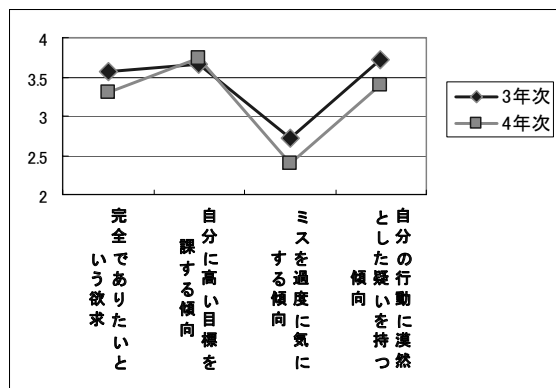


図 7 自己志向的完全主義 (カテゴリー別)

表4 自己志向的完全主義(項目別)

カテゴリー別	項目	3年次(n=58)		4年次(n=47)	
		mean	SD	mean	SD
完全でありたいとい	どんなことでも完璧にやり遂げる事が私のモットーである	3.49	1.32	3.19	1.36
	物事が常にうまくできていないと気がすまない	3.68	1.34	3.45	1.21
	中途半端な出来では気がすまない	3.57	1.43	3.26	1.06
	できる限り、完璧であろうと努力する	3.74	1.28	3.53	1.21
	やるべき事は完璧にやらなければならない	3.33	1.27	3.13	1.17
自分に高い目標を課する傾向	いつも、周りの人より高い目標をもとうと思う	3.17	1.17	3.06	1.28
	何事においても最高の水準を目指している	3.00	1.30	3.21	1.37
	高い目標を持つ方が、自分のためになると思う	4.26	1.25	4.55	1.04
	簡単な課題ばかり選んでいては、駄目な人間になる	3.73	1.32	3.91	1.19
	自分の能力を最大限に引き出すような理想を持つべきである	4.16	1.25	3.96	1.41
ミスを過度に気にする傾向	”失敗は成功のもと”などと考えられない	2.44	1.30	2.11	1.17
	ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう	3.26	1.29	3.13	1.36
	人前で失敗することなど、とんでもないことだ	2.77	1.15	2.43	1.21
	少しでもミスがあれば、完全に失敗したのと同然である	2.42	1.27	2.04	0.91
	完璧にできなければ、成功とはいわない	2.57	1.35	2.32	1.29
自分自身に疑念を持つ傾向	注意深くやった仕事でも欠点があるような気がして心配になる	3.69	1.38	3.38	1.44
	何かをやり残しているようで、不安になることがある	3.97	1.31	3.53	1.40
	納得できる仕事をするには、人一倍時間がかかる	4.19	1.33	3.83	1.37
	念には念を入れる方である	3.64	1.22	3.43	1.31
	戸締まりや火の始末などは、何回か確かめないと不安である	3.05	1.60	2.85	1.72

VIII. 考 察

1. 喜び・悲しみ・怒りの体験

3年次の喜び・悲しみの体験に強い影響を与えたのは、友人関係との回答が多かった。学生にとって、最も身近な存在は、友人であり喜び・悲しみを共有しているといえる。一方、怒りの体験は臨地実習が最も多くなっていた。この時期の学生は、1年生で基礎看護学実習Ⅰを2年生で基礎看護学実習Ⅱを終了している。学生は、初めての臨地実習で、実習室では測定できていた血圧測定や脈拍測定ができず、緊張感が高まる¹⁰⁾。また、患者とのコミュニケーションも課題のひとつである。携帯電話やインターネットが普及した現代は、若者のコミュニケーションや対人関係のありように変化が生じている¹¹⁾。そのため、患者と向き合い、コミュニケーションをとることに困難を感じるものが多いと思われ、このような体験から実習に戸惑いを感じ、その体験が怒りの体験となって印象に残っていると思われる。

4年次では、喜び、悲しみ、怒りの体験に強い影響を与えたのは、いずれも家族が多くなっていた。4年次では、学生の進路選択など家族の意向も踏まえて決定する場合が多く、

喜び、悲しみ、怒りの体験全てを家族と共有していると考えられる。

2. 大学生生活不安・自己受容性・自己志向的完全主義の学年別比較

1) 大学生生活不安

大学生生活不安とは、大学生生活に不明瞭な恐怖感を抱くことである。3年次と4年次の平均値を比較すると、『4年間で卒業できるかどうか不安』『友達と協力できるか不安』『分からない問題に出合った時、頭が真っ白』『大学の成績を考えると憂鬱』など3年次が高くなっていた。この時期は、臨地実習前であり、臨地実習前の進級判定、また、実習開始からの自分の持つ知識やグループ活動に不安を持っていると考えられる。そこで、『転学あるいは転部したい』『大学を退学したいと思う』という気持ちにまで追い込まれることが予測される。

『先生と話をするとき、緊張する』『生活費が足りるかどうか心配』『申請した授業の単位がもらえるか心配』『卒業論文がうまく書けるか心配』では、4年次が高くなっていた。4年次になると卒業論文作成、進路選択など教員と個人的に教員と面談する機会が多くなり、学生の緊張度は高まると考える。また、『生活費が足りるかどうか心配』と経済的にも課題を抱えていると考えられる。卒業を視野に入れながらも『入学した学部が自分に合っていない』『この大学にいと不安な気持ちになる』など精神的にも不安定な状況にあることが分かる。

2) 自己受容性

自己受容性とは、身体的側面・能力的側面・性格などの自己の諸側面をありのままに受け入れることである。3年次と4年次の平均値を比較すると、『私は自分の特徴がわかる』『私は自分のことは自分で解決する』の項目で3年次の平均値が高かった。

4年次の平均値が高い項目は『私は生きる価値のない人間である』『私は生まれてこない方が良かった』『私は生きていても仕方ない』の項目で有意差がみられ、4年次の学生は、自己を価値ある存在とみなし、その存在に意味を見出し自己の人間的価値を信じていることが分かる。また、『私は自分に合った生活をしている』と現在の自己を嫌わず、自分をそのまま承認していることが分かる。

4年次のこの時期の学生は、臨地実習が終了し、大きな課題を乗り越えたという自信が心にゆとり持つことができ、自己受容性が高まると考える。

3) 自己志向的完全主義

自己志向的完全主義とは、自分の行動に過度な完全を求める傾向のことである。3年次と4年次を比較すると「自分に高い目標を課する傾向」でわずかに4年次が高くなっていたが、「完全でありたいという欲求」「ミスを過度に気にする傾向」「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」では、3年次が高くなっていた。学生は経験や学習の積み重ねにより日々変化し成長する。特に臨地実習では、看護の魅力の内面化することができ、職業的社会化に影響を及ぼしていると考えられる¹²⁾。学生は、臨地実習を終了することにより、看護学生としてのアイデンティティを高め¹³⁾、自信を持つことができていると考えられる。

IX. 結 語

4年次のこの時期の看護学生に対する教育指導内容として、目前の気になる課題に着実に優先順位を決め克服していくこと、学生の能力に合わせた進路指導の充実などで4年次生としての自信と卒業に向けた目標設定に繋がることができると考えられる。学生の挑戦

するその時の課題に合わせた指導内容の選択と適切な指導時期が重要といえる。

自己受容性の高まりは、大学生活の不安の軽減や自分に完全なことを求める志向への変化となり学生の成長につながる。さらに、最終学年次学生への指導にとどまらず、各学年に応じて学習意欲を高める教育的工夫の必要性が示唆された。

文 献

- 1) 宮沢秀次(1982)、青年期における自己受容性測定スケールの検討、人文科学論集、市大学・市学園短期大学人文科学研究会、32 ; 113-139
- 2) 近藤邦(2006)、看護学生が実習前に感じる不安に関する研究 ―基礎看護学実習と領域別実習との比較―、三育学院短期大学紀要 34 ; 11-25
- 3) 長谷川真美他(2004)、看護学生の悩みと援助規範意識に関する一考察、第35回看護教育、日本看護協会 ; 157
- 4) 前掲1) 113 - 139
- 5) 藤井義久他(2005)、心理測定尺度集Ⅲ、サイエンス社、東京 ; 199
- 6) 桜井茂男(1997)、自己に求める完全主義と抑うつ傾向及び絶望感との関係、心理学研究 58 ; 179-186.
- 7) 前掲1) 113 - 139
- 8) 前掲4) 445
- 9) 前掲5) 181
- 10) 重久加代子(2003)、はじめての臨地実習で経験したケアの本質、看護教育、44(2) ; 108
- 11) 橋元良明(1999)、子ども・青少年とコミュニケーション、北樹出版 ; 1-25
- 12) 小元まき子(2009)、4年制大学における看護学生の社会化 ―4年次の学生を対象として、医療看護研究、5(1) ; 91-96
- 13) マイマイティ・パリダ(2009)、職業的アイデンティティを高める実習直前指導が実習の学びに及ぼす効果、茨城県立医療大学紀要、14 ; 77-85
- 14) 速水敏彦(2004)、大学生の日常的感情に関する研究―感情日誌を用いて―名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要、心理発達科学 ; 49
- 15) 岩本真紀(2002)、看護学生のライフスタイルにおける学年比較 ―高校時代から現在にかけての変化から―、第33回日本看護学会誌 看護教育 ; 192-194
- 16) フランク・ゴープル/小口忠彦訳(1997)、マズローの心理学、産能大学出版部 ; 44-48